

# 昭道報

Shodoho --- Newsletter of Shodokan ---

第20号(第5版)

平成19年11月25日発行

<監修>

JAA師範 成山哲郎

<編集・発行者>

JAA関西合気道競技連盟

広報部 昭道報係

※JAAとはJapan Aikido Associationの略で、NPO法人 日本合気道協会を指します。

## 第七回国際合気道競技大会

二〇〇七年八月二日から四日にかけて、アメリカ合衆国オハイオ州パンドリアにあるパトラー高校体育館で第七回国際合気道競技大会が開催されました。参加国はアメリカ、イギリス、ブラジル、ベルギー、日本の五カ国。日本からの参加者はJAA昭道館から十八名、関東から三名。国際大会を日本以外の国でも開催したいという各国からの希望と運営能力の実態のギャップは今回も大きかったようです。どのような大会だったのか、参加された方のレポートをご紹介します。紙面の都合上大幅に編集させていただきましたことをご了承ください。

### JAA審判部長 大森(佐藤)竜一

【講習会】成山師範による講習会が二日間にわたって行われました。講習会に参加して改めて合気道の技の多さを感じましたが、今講習会では一つの技にかける時間を多めに取ることが出来たように感じました。講習会の充実感がそう感じさせたのだと思います。

講習会参加状況は、ほとんどの大会参加者は講習会へ参加をしていました。BAAの多くのメンバーが試合に備える時間に割り当てていたのが目に付きました。国際合気道競技大会は「競技大会」「講習会」「TAIN会議」が三本柱のほぞです。講習会は貴重な技術発信の場であるので、日本合気道協会として各国に講習会への参加を公式に呼びかける必要があると思います。

【競技大会】今大会で特に目立ったのは外国人選手の活躍です。特にUK昭道館の選手が乱取も形も相当地なレベルに達してきているのが目立ちました。

乱取競技については、どの国も世代交代の時期に来ているようで、活躍する選手の中にははじめて見かける選手も多かったです。日本人選

手については、関西が十八名ほどの選手を送り込みましたが、外国人選手が実力をつけてきている中、なかなか勝ち続けるのは難しいようでした。そのような状況の中で、決して身体が大きくない(むしろ小さい)河村未来さんが、乱取競技個人戦において相手のバランスを崩し、勝機を捉えて相手を投げ、優勝したのがとても印象的でした。正に基本の練習を積み重ねてきた成果といえると思います。

演武競技については、どの国の選手も上手にはなってきたので、乱取基本の形十七本も古流護身の形も正しく演技されていた部分が目につきました。指導者が増えれば増えるほど、その指導者の個性が良くも悪くもその特徴として伝えられてしまいます。基本として押さえておかなければならない部分の区別をつけた指導を指導者にはお願いしたいものです。

演武の結果は、JAA昭道館チーム、UK昭道館、BAAが各種目とも活躍していました。特に正しく演技しているのはJAA昭道館チームでしたが、外国選手の派手な技に



勝利を与えてしまう審査員も数多くいました。審査員についても審判員同様にきちんとした講習会を行い、何を見るのかを正しく理解し、またそれらを見極める力をつける(つけて頂く) 必要性を感じました。

【最後に】リーズ、オハイオでの両大会とも、日本で行われる国際大会と比べてかなり質の低いものとなってしまうと思います。京都の後はブラジルと欧州のイギリス以外の国が候補に上がっていますが、より悲惨な状況を繰り返すだけだと思います。この報告書を受けて、国際大会のあり方について真摯に考えていただきたいと思います。

### JAA関西合気道競技連盟審判部 副部長 酒井進之介

【講習会】講習会中の成山師範の通訳には現在米国カリフォルニア州で指導されている昭道館USCのボブ・デズブラ先生が担当され、その滑らかで聞き取りやすい通訳は全ての参加者にとって大変有益であった。さて、講習内容を報告する前に指

摘しなければならぬことがある。それは国際大会が競技会、TAIN会議、講習会の三位一体により構成されているにもかかわらず、今回の大会においてもBAAのうち多くのメンバーが講習会への参加をしていなかった事実である。

我々の合気道は指導方法の違いや国情の違いを乗り越え、競技を通して国際大会という一つの舞台を持つている。しかし、その歴史発生の面からも「合気道競技」には未だに日本から発信しなければならぬ技術、考え方が多く、それが十分に伝わりきっていないのをあらゆる面に見て取ることが出来る。乱取基本の形や古流護身の形に含まれる技のつながりや勝機のとらえ方は、形にも乱取にも通じる合気道競技の普遍的な真理があり、それらが演武競技においても活かされ、また乱取競技にも反映されなければ、我々の合気道の独自性は薄っぺらなものとなるであろう。合気道競技の理論と実技を正しく伝え、この素晴らしい内容を出来るだけ多くの道友に伝えるためにも国際大会参加者には是非、講習会への参加をしていただきたいと思います。間違いなくそれだけの内容と価値が成山師範の講習会にはあることを私は自信を持って主張したい。その意味では前回、前々回と続き一部の団体が講習会に不参加であったことは大変残念な出来事であった。

【競技大会】今大会でもっとも問題であったのは乱取においても演武においても審判員が完全に不足していたことである。まず乱取競技において個人戦も団体戦も全ての

試合をたった四人の主審で切り抜けた。審判も人間である。立て続けに何試合もこなせば、正確な判断ができなくなる可能性も必然的に増えてくる。また、副審については先程まで競技をしていった選手が前の試合で負けてから道着のままで行なうという、国際大会としてはありえない状況まで現出した。旗の振り方を知らずに副審として現れた方が少なくなかったことを改めて報告しなければならぬ。またルールの理解にいたってはまだまだ不十分であり、きつとルールブックを斜め読みした程度、もしくは読んだこともない「審判員」の方々が少なくなかったのではないだろうか。また、実際スタッフが時計の計り方を知らない、ボードのつけ方を知らないという状態で大会は始まった。

【最後に】私はボブ・デズブラ先生を始め、米国の指導者、特にオハイオで指導を担当しているキャロル・アップル先生、ウェイド・カレント氏の大会運営に対する真摯な姿勢には大いに感銘を受けた。あれだけの競技者と試合数を抱え、あそこまでの大会にされたことは並大抵のご努力ではなかったと思う。だが、日本での大会しか見たことのない方が描いているような国際大会が米国で行われたのかといえればそれは明らかに違うということを報告しておかなければならない。

**J A A 昭道館 藤本和義**

【講習会】十七本や護身の形では基本にも関わらずに、逆構え当てで受けが後受身では無く、後ろに宙返りしたりと過剰な受けが多く見受けられました。そのため、技のかける方向とそれに対する受け方が説明されました。セミナーは段級問わず少年部の子から年配の方まで、中には合気道ではなく柔術の有段者が居たりと、

国際大会ならではの雰囲気や貴重なものでした。

**【競技大会】大会運営に関して、一番目立ったのは審判員の数の不足でした。特に主審クラスが**

少ないのは致命的で、ずっと出っぱなしの状態でした。コートではタイマーは無くストップウォッチで時間を計っており、正確に時間が計れているのかは外からは確認できないので信憑性に欠けました。ボードは少年部の子供達

**J A A 昭道館 菅野健太郎**

【講習会】内容によっては形と順番を伝えるのが精一杯で自分の指導力の未熟さに申し訳ない思いでしたが、それでも一生懸命説明を聞き、学ぼうとしてくれたメンバーはとても純粋で真剣でした。教えることにより逆に教わるもののほうが多かったです。

【最後に】今大会でもとても勉強になったことがあります。それは海外チームの結束力の強さです。自分の競技のことしか考えていなかった時に師範から「自分のチームの応援もできないならやめちまえ!!」と叱られ、その後周りのチームを見て見るとチーム一丸となって応援する光景がありました。一番大事なことはなかを海外で肌を感じ、気づくことができた気がしました。結果は予想以下でしたが得たものは予想以上だったと思います。何時どこでどんな経験ができるかはわかりませんが、そんなチャンス逃がさないためにもいろんなことに積極的にチャレンジするべきだと思います。大会を運営して下さったJ A A U S A のスタッフ、各国のメンバー、富木館長、二見先生、田中先生、御同行して下さった成山師範、大森先生、酒井先生、昭道館の皆さんありがとうございました。



【競技大会】演武では、特に海外の選手はともな難度の高い受身も難なくこなす高度な技術を持つていると思いましたが、当て身技に対する受身が不十分であったと思います。当て身技は統一力と移動力を使って掛ける技です。いくつかのチームの選手はその場で飛び受身をとっていました。これがこれでは移動力が生かされません。この点が改善されれば更に良い演武になるはず。乱取では、まず服装ですが特に海外の女性については胸元の隠れるTシャツを着用してほしいと思います。男性は中には手に滑り止めの粉をつける、マウスピースをつける選手もいました。技術性を追求できればそのようなものは不要なはず。服装も上は道衣なのにはジャケットパンツのまま競技している選手が見受けられました。公式試合なのでそこからその点は競技規則を守ってほしいです。

【最後に】会場の片隅で少年部の試合が行われていて、あの子どもが将来は国際大会の舞台に立つかもしれないと思うと、自分は勿論のこと少年部から盛り上げていきたいと思えます。

**最終日にはマスターズ演武が**

がしていましたが、点数の付け方を理解しきれないため、何度となく主審や他の審判の修正が入り、その都度、試合が中断され進行が遅れるばかりでした。子供だからダメだとは思いませんが、正規の大会には相応しくありません。全体を通して審判、スタッフ、設備が不足してしました。

J A A 昭道館 大西美緒

【講習会】海外で行われた国際大会に、今回初めて参加しました。今までの日本国外における国際大会参加者の話を聞くと、どのような事になるか不安でした。しかし、セミナーで不安は吹っ飛びました。一緒に稽古した方々の熱心さもあり、とても良い稽古が出来ました。全体を見渡すと話を聞く時の姿勢が出来ていない方もいました。一人一人手を合わせてみると、とても熱心で素晴らしい方ばかりでした。しかし何より残念だったのは、B A Aの多くの選手がセミナーに参加せず、観客席からセミナーを見下ろし、ビデオ撮影だけをしていたことです。

J A A 昭道館 河村未末

【会場までの道のり】やはり起こってしまいました。大阪を離れての大会で、いつも私に起こるハプニング。切符を紛失し、乗り換え駅を間違えて、集合時間約十分遅刻でようやく開空まで到着。「二度あることは三度ある」開空から長い飛行機の旅を終えて、デトロイト空港に到着。しかし、なぜか私だけ入国審査でひっかかりどう見ても怪しげな人ばかりがいる別室に連行されてしまいました。約三十分後、次は個室に一人で呼ばれ、怖そうな黒人の方から英語で猛烈な質問攻めを受

判・審査に関わらせて頂いており、まだまだ勉強中の身です。しかし国際大会という大きな、影響力の強い大会では特に審判の技術の高さが求められるのですが、それに見合った審判員が不足していたように思いました。演武競技では、各審判員の審査基準に疑問を持ちました。乱取りは審判に対する不信感が更に大きかったです。特に副審の突きに対する判定があいまいで、感覚で挙げているとように見えました。また私が徒手側の時、相手を両手で掴んでいない時に返し技を掛けられました。明らかに短刀側の反則ですが、審判は返し技にポイントを与えていました。この他に、乱取り女子個人戦が途中で二分交代で行われたり、ボードの点数の付け方が人によって違ったりと、

様々でした。この様な光景を思い出すと『国際大会』と呼べる大会だったのか疑問が残ります。審判基準に対してだけではなく、演武そのものが何故あれ程基本とかけ離れるのか疑問に思いました。ところが、護身の形は驚くほどまともでした。ある人から、護身の形は過去に日本の選手が優勝してきていて、海外の選手はその演武を研究している、だから正しい形になるのだ。十七本はずっと海外の選手が優勝している、それを真似ているからあのような形になるのだ、と聞きま

【最後に】大会に参加して多くの事を考えるきっかけが出来ました。いろんな意味で、参加して良かったと心の底から思います。うと歩いてみると、見覚えのある人影が。先に行ってしまったと思っていた昭道館メンバーと合流でき、なんとか現地に到着できました。刺激的な一日でした。

【競技大会】演武競技短刀基本技十七本に山崎さんと出場し、二回戦で敗退しました。本気で攻撃をし、技をかけるという自分達の演武に自信を持っていたのですが、思うような結果が出せずかなり落ち込みました。勝ち進むチームは、派手に技をかけてありえない受身をとる演武がほとんど。審判はどんな基準で旗を上げているのか疑問を抱いていました。護身の形ではきちんとした技

がかけられているのに、短刀基本技十七本でなぜこのようなズレが生じるのか色々考えてみると、前回の大会優勝者の演武に原因があるような気がします。護身の形や自由技では、きちんとした技をかける日本チームが前回の優勝者になっていきますが、短刀基本技十七本では前回と前々回に派手な受身を取るチームが優勝しているのです。次回の大会では十七本で絶対に優勝しなければならぬと改めて感じました。

乱取り個人戦では、やはり手足の長い相手には苦戦しました。体捌きをせず真正面から突進し、腕を持たれば力任せに振り回す。何ともいえない迫力でした。とりあえず動いて相手のバランスを崩し、わき腹を狙うしか対応できませんでした。自分の理想の乱取りではない形になってしまいました。何が、何とか決勝まで進むことができました。決勝での審判は大森先生で、公平な審判をしていたので、のびのびと乱取りをすることができました。相手はイギリスB A A。後ろで昭道館のメンバーが応援してくれていた確なアドバイスもしていただけたおかげで、優勝することができました。ありがとうございます。

【最後に】私が合気道に出会ってから、今年でちょうど十年になります。合気道を通じて新しい仲間が増え、様々な経験をさせていただくことができました。今の私があるのは合気道のおかげだと言っているほどです。次の京都の大会が素晴らしいものになるよう、そしてまた外から来られる方々の今回アメリカで色々お世話になったお返しができるよう、自分のできる範囲でがんばります。



J A A 昭道館 山崎文加

【マナーの悪さ】私は今回の海外での大会は二度目だったので、アメリカでの大会は日本で行われる大会と違い、畳ではなくレスリング用のマットが敷かれた会場で、タイマーやボードなどの備品もなく、選手の中には上半身は道衣で下は黒いズボンであったり、靴下を履いてセミナーや試合に参加したり、ガムを噛みながらの主審や副審、審判員といったマナーや意識の違いにはとても驚き、とてもマイナーな印象を持ちました。

【講習会】一緒に稽古する中で、基本であっても基本とは違う技をする人がほとんどで、違和感を覚えました。昭道館の傘下である方々の基本は、昭道館の稽古シ

# 第三十一回関西合気道競技大会

昭道館本部

ジェニー ペー ジェレ

二〇〇六年十一月二十六日、大阪市立阿倍野スポーツセンターにて第三十一回関西合気道競技大会が開催されました。終日ともエキサイティングな一日となりました。

大会会場は多目的に利用できるフロアに畳を敷き詰めた会場で、三つのコートと見学者用の席が設けられていました。会場に入ると正面に「無心無構」の館旗があり、「ここは確かに昭道館のスペースだ」と安堵しました。私の演武相手と私は早くに到着しましたが、既にウォーミングアップをする人や大会準備をする人がいて、エネルギーが溢れる空間になっていました。

開会式では、成山哲郎師範による挨拶やトロフィーの変換、選手宣誓などがありました。

その後、三つのコートで一斉に戦いが繰り広げられ、合気道を始めて数ヶ月に満たない選手からとても創造的な演武を披露する高段者まで、レベル別を実施された演武を含め、各競技の観戦を楽しみました。大会というのはいくさんの努力の結晶であり、それは多くの合気道をする人々のレベルを高めるように思います。

そして乱取はともエキサイティングなものなのだと気づきました。この大会の為に、はるかかなたのイギリスから来た選手がいたり、国内でも遠方から来た

選手がいたり、とても興味深い戦いがいくつもありました。また、混合団体戦では初めて徒手乱取を見ました。

私がこの大会で感心したのは応援する人たちの態度です。互いに応援し、たたえ合う姿はとても素晴らしく、大会が人々をつなげるということを感じました。

この大会で印象的だったのは成山哲郎師範（受は酒井指導員、藤本指導員）による演武でした。パワフルな技が披露されるたびに受身の音が、静寂な会場に響き渡りました。

大会後のパーティーは入賞者のお祝いをする場でもあり、忘れがたい経験となりました。全体を通して気づいたことは、本当のスポーツマン精神をたたえるのにとってもふさわしいものであり、来年も楽しみにしています。



(前頁からの続き)

STEMを忠実に進めていることがよく感じられました。

【競技大会】演武競技全体の感想は、正しいかどうかというよりいかに派手なパフォーマンスができるかといった感じでした。規定の十七本や護身の形でも、まったく違うものに見える技がでてきたり、技をかけるというより、パフォーマンスでした。判定方法も、種目によってばらばらで統一されていませんでした。そして、もちろん審査基準もばらばらでした。そんな厳しい状況の中で、自由演武で優勝した酒井先生と菅野君の組、護身の形で優勝した大西さんと酒井朱音さんの組はとても素晴らしいものでした。

乱取りに関しては、主審・副審のジャッジなど、いろんな場面で疑問に感じるが多かったです。

## JAA昭道館 アラン スミス

【会場までの道のり】昭道館本部チームとして参加できて嬉しかったのですが、大会会場への行程でのハプニングは武道精神を試す試練となりました。関西空港からデトロイトまで十三時間、フライト中のエンターテイメントがなく、心地よくない時を過ごしました。そして到着したデトロイトでは悪夢の中をさまよっているように感じました。荷物を受け取るまで四十分もかかりました。その上、薬物も持ってないし、テロリストでもスパイでもないのに河村さんが尋問される羽目に。セキ

す。「どこ見てんねん」とついで言いたくなるような(言ったのかもしれないですが・・・)、突きや体捌きに対する判定、三分の二とかいうボードのポイントにただただ驚くばかりでした。優勝した河村さんは、誰が見ても納得いく内容であり、我を見失うことなく最後まで自分らしく乱取り出来たことが本場にすごいと思います。

【最後に】この大会を通して、海外の実態やチームのこと、人のことを知りました。今から私が出来ること、しなければならぬことをもう一度よく考えて、指導者、選手、審判・審査員の立場から学んだこと、自分が経験したことを次の京都大会に繋げていきたいと思えます。

ユリテイから木刀やら杖を受け取り、次の飛行機に乗る為のゲートに進みました。そして知らされたのは、次のオハイオへの便にはチーム全員が搭乗できないということ。私達には選択が許されず、次の便に乗る五名が航空会社側によって決められました。そして私を含む五名が搭乗口に進むと、ほんの十分前に言われたことが覆され、たった二名しか搭乗できないことになりました。それは河村さんと私。先にオハイオに到着した河村さんと私は、私達二名の荷物だけでなく、昭道館チーム全員の荷物が一緒に運ばれたということを知りました。何てこと

でしょう、通常、荷物は搭乗する便と共に運ばれますが、これは明らかにルールから外れています。もし河村さん一人だったら、これらのことを慣れない英語で航空会社職員とかけあって事を進めなければならなかったでしょう。私と一緒にフライトで来れてよかったです。チームはバラバラのフライトで到着しました。これらの中で私はあきれ返りました。二度とこの航空会社を使うことはないでしょう。

その他といえば、ホテルは安い割にいいホテルでしたし、関東の学生やブラジルチームと同じホテルで、彼らがホテル近辺のことを調べてくれていたのは助かりました。また、そのホテルから会場となったバンダリアに行く公共交通手段がない状態でしたが、ホスト国であるアメリカスタッフが送迎してくれました。

【競技大会】今回、富木昌子JAA昭道館館長が居られたことに非常に感銘を受けました。この国際大会の為に遠いところまで来られたのに驚きました。一方、今大会では参加者が少ないことは初めから明白だったので、それは寂しいことです。また、演武を五人の審査員で審査するということを考えると審査員が不足していることも明白でした。大森先生と酒井先生は休みなく、多くの試合の審判をされています。一部の審判員は試合の進め方を余り知らないようでした。また旗上げ方式で判定されましたが、二組の演武が終わった後、主審が

(次頁へ続く)



た。

真冬の早朝なので道場に着くまでは非常に寒いのですが、入ってしまおうと毎日100人以上の方々が来られているので意外と寒くありません。逆に一人一畳ほどのスペースなのでいつもよりも暖かく感じました。今回で2年続けて皆勤を達成する事ができました。初めの内は行かなきゃと半ば義務のように参加していましたが、2・3日続けてしまおうと皆勤ができるかドキドキ楽しみで、後半は当たり前のようになり事ができました。

成山師範が指導される稽古はやはり有意義だと思えました。頭の中で整理できていない技を毎日反復練習して、それを応用技につなげる事ができるので非常に効率がいいと思います。それと早朝稽古なのでいつも以上に何か吸収していこうと真剣に聞き稽古することができず。合気道はやはり楽しいと感じました。

最終日の日曜日は納会でした。稽古の後にはおつまみとビールで乾杯！特に師範の奥さんに作っていただいたぜんざいは格別でした。これまでもあまりしゃべった事のない人たちとも話をする事ができて楽しい時間を過ごす事ができました。

一週間と短い間でしたが充実したものとなりました。これからまたと短い時間でもこのようにならなると感じられる稽古が出来るようにしていきたいです。稽古に参加すると、頭もスキッと爽やかな気持ちでその一日が過ごすことができます。また続けて来年も参加していこうと思えます。

今回皆勤された方は六十五名おられたそうです。今年参加しようか悩んでおられた方はぜひ来年は参加してみてくださいね。きっと、いつもの稽古とは違う気付きが得られると思いますよ。

【第二十六回関西学生合気道新人競技大会結果】開催日：二〇〇六年十二月十日(日) 場所：住吉武道館(大阪市住吉区) ■演武競技

- 「対徒手男子」①関西学院大学(畑中悠祐・奥田直樹)②近畿大学(森田俊亮・馬場伸幸)③大阪教育大学(塩路竜平・井上将樹)「対徒手(女子)」①関西学院大学(千原小葉子・亀田真貴子)②大阪教育大学(川西麻美・松島みどり)③奈良女子大学(山口・松本)「対武器男子」①関西学院大学(吉岡 究・内田雄士)②大阪

教育大学(梶田武志・坂口 巨基)③国士舘大学(根岸隼人・吉川学)「対武器女子」①大阪商業大学(前田麻美・城間奈津子)②国士舘大学(十時睦美・宮良友紀)③大阪市立大学(日根埜谷美里・高瀬亜紀) ■短刀乱取競技

- 「男子個人」①橋本宏太(大阪商業大学)②深町陽輝(国士舘大学)③吉川学(国士舘大学)「女子個人」①山本理絵(天理大学)②岩崎あゆみ(関西学院大学)③河西朋奈(大阪商業大学)

The 7th International Aikido Tournament in USA 第7回国際合気道競技大会

J A A 昭道館 松井孝好

【講習会】自分は国際大会に出場したのは今回で二回目ですが、海外での大会や講習会に参加することは初めてでした。まず、試合の会場がたまたみではなくレスリングマットのようなものであることに驚きました。国際大会という大舞台においてそういう環境や場にとまどいを感じました。講習会では海外の人と組んで稽古することになったのですが、これはすごく良い経験になりました。言葉がまったく通じない相手と稽古する。言葉が通じなくても体の表現で理解しあい、そしてお互い稽古する。合気道、講習会を通じて海外ですごく素晴らしい体験をさせていただきました。

【競技大会】審判員のレベルなど気になったことはさておき、自分自身のことを言えば、良い結果を出せませんでした。いかに日頃の稽古の積み重ねが大事かというのを改めて再認識させられました。演武では護身の形で菅野さんと出場し、なんとか準優勝したものの、種目別混合団体戦と短刀乱取団体戦も自分が納得いく結果を全く出せませんでした。

【最後に】これを機に自分自身の中で気持ちの面でも心を入れ替え、今回の悔しさを忘れずにこれからの稽古によりいっそう励み、頑張る取り組んでいきたいと思えます。

J A A 昭道館 酒井朱音

【長い道のり】私は合気道を学びはじめて七年目になります。今回のアメリカが始めて参加する国際大会となりました。しかも個人的にも海外に行ったことがなく全てが初めての体験となりました。飛行機はまず日本を出発してから約十三時間かけてアメリカのデトロイトへ行き、国内線に乗り継ぎし、一時間程でデイトン空港へ、夕方五時前には現地に到着してウェルカムパーティーに出席する予定でした。関西空港を出発する時点で、すでに三十分飛行機が遅れていました。少しだけ不安に感じつつも、国際線に乗るのも長時間のフライトも初めてだったものですから、はしゃいでいました。飛行機の中では憧れの「チキンオリーブ」も体験し、淡々と時間も過ぎていきました。飛行機は順調?!に予定よりも遅れてデトロイトに着きました。乗り継ぎの時間がほとんどない中、入国審査はすごい列。そんな中、河村さんが入国審査で別室につれていかれました。空港の人の話では、「長時間かかることもあるので彼女を置いていくしかない」とのことでした。結局全員次の飛行機に乗り遅れました。デトロイトからデイトンへの飛行機は、小さく少人数しか乗れないため十八人振り替えることは容易なことではなく、結局五時間以上も空港で待機し、やっとの思いでホテルにいったのは夜十一時を回っていました。

【競技大会】有段の短刀十七本

の演武で私が感じた事を率直に書くと、「基本に忠実に演武しているペアよりも、少々脚色を加えてでも派手に見えるように演武を構成しているペアが勝つ」ということです。これには本当にびっくりしました。乱取では、主審が「止め」を「ストップ」、「はじめ」を「つづけて」や「コンテニュー」「ゴー」など統一した言葉が使えていなかったり、できていなかったり、審判自身が冷静さを失い、選手に声を荒げて詰め寄る場面などもありました。主審ができる審判員の少なさと、ボードやタイムの計り方などを正確に知っている人の少なさと、国際大会であるということに違和感がありました。

【最後に】今回、言葉も食事も気候も違うところで試合に臨む事の大変さを痛感しました。選手にとっては環境が変わることで自分の力を思うように発揮できない人も多いと思います。そんな中で本当に色々な人に助けられました。今日本チームとして参加したニリさん、アランさん、ジェニーさんも本当にたくさん支えてくれました。そして彼らが日本に来て、昭道館で練習している毎日、言葉の壁や習慣の違いなど大変なことも多いのだらうと思えます。これからはもっとコミュニケーションをとり、一緒に稽古していきたいと思えます。そして二年後の京都の大会で何か役に立てようがんばりたいと思えます。



# 第五回関西少年合気道競技大会

二〇〇七年七月二十二日(日)、大阪市住吉区にある住吉武道館にて開催されました。成長する少年少女達と共に、年々、大きくなっていく大会、今年も両親やおじいさんおばあさんに見守られて普段の稽古の成果を披露していました。今回は、関東から参加された昭道館いわき支部からのレポートをご紹介します。

## 大会へ参加して

昭道館いわき支部 野口智行

この度の、関西少年部大会への参加では、子供たちをはじめ我々も大変有意義で貴重な経験をすることができた。

まず、混合団体戦では、普段体験することのできない、チームで協力し競い合うという経験をさせることができた。子供たちは、昭道館チームの一員としてチームの仲間とも打ち解け、試合に臨んでいたようである。同じ武道を志す者同士として交流も早く進んでおり、互いに声を掛け合いながら試合を行なう姿や、待機中の様子など、見ていて微笑ましい感があった。チーム一丸となって試合に臨むことが団結力を生み、初対面同士であつてもよき友情がうまれたと思う。武道とは個の戦いであるが教育の一環としてとらえたとき、その有効性・有益性は非常に高く、少年部大会の団体戦の良さを改めて感じる事ができた。

また、演武競技や乱取競技においても、関西の選手の間々のレベル

ルの高さに感服した。今回「いわき支部」として、優勝や準優勝の栄光を得ることができたものの、関西の選手の、技の正確性や移動力、そして残心には学ぶところが多くあり、今後地方での稽古を進めるにあたり大変参考となった。さらに、指導員演武を拝見し感じたのは、このような本来の「技」を支部の子供たち全員に、直に見せてあげたいという事である。本物の技を見、本物の技に触れることがいかに子供たちの意識の中に入り込むかを、改めて学ぶことができた。指導員の方々の演武を見ていた子供たちの目の輝きを見、このことを強く感じた。また、

(次頁上段へ続く)



The 7th International Aikido Tournament in USA 第七回国際合気道競技大会

## J A A 昭道館

ニルファアローロバーツ

私が初めて国際大会に出場したのは、日本での生活のスタートとなった勝浦大会(二〇〇五年開催)でした。そして今回が私にとって二回目の国際大会です。前回とは誇り高きことです。

前回の勝浦大会と今回のパンダリア大会との違いの一つは、参加国数・参加者数です。大会場所は海外から行くには不便なところにあること、選手の金銭面などから考えると二年というサイクルで参加するのは難しいことがあげられます。ホスト国であるアメリカの人たちはとても親切で、宿泊先から会場まで毎日、日本チームを含む選手達を送迎してくれました。彼らの親切には非常に感謝していますし、彼らがこの大会をいよいよにしようと思えば、大会をいよいよにしようと思えば、多様でアスリートに適したおいしいものがありました。また高いものから安いものまで選択肢もあり、よかったですと思います。

【競技大会】多くの審判のレベルが低く、ルールを勉強しトレーニングを積んだとは思えません。言うことを聴かない選手を静めてどこるか、怒鳴りつける主審までいる始末。選手はというと、

勝機・移動力・ルールの知識・体捌・技術が高い選手もいました。試合をする選手もいました。「力を使え!」とアドバイスするチームメイトがいたり、プロテクターのようなものを着用する選手がいたり(審判員の指導でいや取り外していました)しました。これは合気道というもののや乱取というものを誤解していることの現われです。最初はがっかりしましたが、パワフルな選手を負かす技術力向上に励まなければと思っています。河村選手や他の優秀な選手がそれが可能であることを示してくれました。また本松選手がすばやい動きやいろいろな技で相手を手こずらせていたのもとても参考になりました。

## J A A 昭道館 南寛子

私が国際大会に行こうと決めたのは、アメリカに行けば、特大のつかいハンバーガーや大好物のケーキがお腹いっぱい食べられると思っただけです。これといって、合気道で国際交流がしたいとか、試合経験を増やしたいといった気持ちはそんなになく、後輩の山本さんも行く事だし、夕食には分厚いステーキが運ばれてくるんだらうなとか考えたら、なんとなく嬉しくなつて、かなり軽い気持ちで参加することに決めました。

【競技大会】基本技十七本では二回戦であつさり負けて悔しかったのですが、日本の試合と違って、基準がよくわからなかったし、何よりイギリスの人達のアクロバットな演武には素直に感激した。技がどうとか合気道の細かいことは私にはよくわからないので、見ていて綺麗な方に旗が上がっても疑問には思いませんでした。

短刀乱取女子団体戦は私達より明らかに大きくて重そうで強そうなグループに当たりました。私達は勝つことよりも、無事に怪我をしないので帰って来られることを祈りました。私は皆さん振り回されて終わりました。突きを捌く体力も残ってなかったし、まじや技をかけるなんてもつてのほかでした。こんなに三分間を長く感じたのも、こんなに試合中酸素が足りないと思つたのも初めてでした。そして私は短刀側の

【最後に】この二年間、昭道館本部で稽古できたことは嬉しく、また国際大会に昭道館本部チームとして参加できたのは努力の賜物であつたと思います。二年後に京都で行われる国際大会に向けて、昭道館を盛り上げて行ければと思います。

(次頁中段へ続く)



本部指導員の方々の充実振りに目を張るものがあり、我々としても、今後地方で指導者育成に積極的に取り組んでいきたいと思う。

おわりに、今大会の参加にあたり快く承諾を頂いた師範をはじめ運営スタッフの方々に感謝申し上げたい。初めての大会、会場でも子供たちが迷うことなく試合に臨むことができたのも、専属の係の方や運営スタッフの温かい心遣いのおかげであると感謝している。今大会から、十、二十年選手が育つことを期待しつつ、今後も礼節を重んじた指導を継続していきたい。

【第五回関西少年合気道競技大会結果】■種目別混合団体戦 ■「小学生の部」①誠心会②誠心会八尾③昭道館連合B「中学生の部」①平野北中学A②平野北中学B③昭道館連合■団体演武(コナミ杯) ■①生駒教室②新金岡教室③向日町教室■演武競技 ■「小学生低学年の部」①阪口拓時—八木貴稔(昭道館本部) ②市平優—西嶋一晃(新金岡教室) ③浅貝凜—山本隼佑(向日町教室) 「高学年の部」①中あずさ—岩本花奈(誠心会) ②堀裕葵—野口貴道(昭道館いわき) ③大内康平—坂本実優(新金岡教室) 「中学生の部」①野口綾音—堀まみ(昭道館いわき) ②杉尾千尋—河内彰人(昭道館本部) ③小西彩華—南優希(平野北中学) 「高校生の部」①福本真啓—蕪下亮(昭道館本部) ②永谷尚之—西田顕証(東岸和田教室) ③尾上慎太郎—永谷奈樹(東岸和田教室) ■短刀乱取競技個人戦 ■「中学生男子」①荒木佑馬(昭道館姫路) ②池永亮(誠心会) ③藤野稜平(向日町教室) 「中学生女子」①野口綾音(昭道館いわき) ②福井明日香(瑞光中学) ③藤原まひる(平野北中学) 「高校生男子」①西田顕証(東岸和田教室) ②蕪下亮(昭道館本部) ③永谷奈樹(東岸和田教室) 「高校生女子」①能祖美幸(昭道館本部) ②嶋崎絵実(平野北) ③有米沙織(平野北) ■最優秀選手賞 ■「小学生の部」堀裕葵(昭道館いわき) 「中学生の部」野口綾音(昭道館いわき) 「高校生の部」蕪下亮(昭道館本部)

The 7th International Aikido Tournament in USA 第7回国際合気道競技大会

ときに間合いが近いと何度も指導を受けました。他にも、短刀突きが高い、胴着をつかまない、体を捌けなど、日本では有り得ないくらい指導の数でした。行く前に監督さんが「南も海外に行けば力だけで技がかかれへんことがわかるやろう」と笑っておっしゃっていたのを思い出して、さらに悔しくて、悲しくなりました。力だけで技がかからないのは、充分わかってはいるつもりだったのに、団体戦や個人戦に参加して、さらに痛い程にわかりました。

【最後に】私は国際大会に参加できて本当によかったと思っております。いろいろな国の人が日本文化の一つである合気道をしていくというのには、大変素晴らしい事です。合気道で国際交流をしたことや、試合での経験は、忘れられない私の一生の思い出になると思います。真っ白で美味しいケーキはいつでも食べられるけれど、あの、表彰パーティーで出された海よりも真っ青な塩味のケーキはもう食べられないでしょう。お金を貸してくれた両親や、一緒に行ってくれた山本さんには、感謝してもきれないぐらいです。国際大会に行つて変わった事の一つに、一日一日の練習を、とても大切に思うようになりました。私が思っていたよりずっとずっと合気道は奥が深く、大学の四年間クラブをしたぐらいでは、きつとまだまだ何もわかっていないのかもしれない。少しでも話を聞き漏らさないように、少しでも上手くなれるようにと、練習も今まで以上に集中するようになりました。

J A A 昭道館 山本理絵

国際大会に参加という貴重な経験をできたことは、本当に私にとって幸運だったと思います。また、経済的にサポートしてくれた両親や昭道館、合気道部には本当に感謝しています。私自身は、今回の大会で満足のいく結果を得られなかったことは後悔がのこるけれどもそこで感じた事、見たこと、触れたものは凄く新鮮でした。

【講習会】セミナーでは海外の人となるべくペアになり稽古ができるように配慮されていましたが、最初はやはり戸惑いのほうが強かったのか積極的にはいけませんでした。けれど、後からは大分緊張もほぐれて楽しめました。級や段位もそれぞれだったのを知っている人はいろんな技を知っていて教えてもらったりもしました。

【競技大会】基本十七本では二回戦でイギリスのペアと対戦し、負けてしまいました。後からそのペアの演武を見ていて迫力があってしかも動きがきれいだという印象を受けました。結局、そのペアが優勝となりましたが、河村先輩・山崎先輩のペアが優勝できなかったのはショックでした。私の最目目かも知れないけど全然見劣りだっと思っていません。動きがきれいで柔らかいけど全然動きたらと思ったからです。女子個人戦では、一回戦敗退でした。互いに指導をたくさん受けていて、私は短刀指導を結構受けたのと間合いが近いといわれるの

が多かったです。自身では適切な間合いでついているつもりでも、先輩からかなり間合いが近めであるという指摘をいただきました。山崎先輩の戦い方は、見ていて迫力がありました。連続技の速さ、短刀突き、体捌きをもって大きな黒人女性に勝ったとき本当に凄いなと思いました。

【最後に】今回の国際大会で、私が出た競技だけでなく皆さんの先輩達の競技を見ることができて大変心に残る大会となりました。国際大会の中で得たものも確かにたくさんありましたが、海外に行きそこで人と触れ合い、学んだこともたくさんありました。やっぱり、負けた後は落ち込みましたがいける声掛けてもらっているうちに前向きにとらえられるようになりました。私が好き言葉に、七転八起というのがありますが、それと同じだと思えました。お金もかかるし行こうか悩みました。けれど、それ以上にいい経験ができたので行ってよかったです。

J A A 昭道館 本松良太

今回、現役の学生として今年で最後の私にとっても大きな財産になると思ひ、参加を決心しました。何より、世界から大勢が参加する中で自分の合気道が通用するのかがどうか確かめてみたいという気持ちがありました。

会場となったオハイオ州のパンダリア高校体育館は畳ではなく





【競技以外の部分】今回、日本チームは入国手続きトラブルや乗継ぎトラブルで予定よりも到着が遅れたのですが、もし予定通りに到着したとしても大会前日。時差ボケを考えると数日余裕をもった行程のほうが理想的だと思います。他のチームは大会の数日前から来たり、または大会後数日滞在し、現地の合気道クラブと稽古での交流をしていました。技だけでなくエチケットなどの面でも見本となるべき日本チームが、そういった活動をするのも求められているのではないのでしょうか。

また海外での大会に参加するにはそれなりの費用がかかります。日本でも補助金のご厚意をいただきましたが、ホスト国であるアメリカでは、寄付をもらう為の活動や、パーティーでのチャリティー、大会会場での販売などの資金集めの努力をしていました。こういった活動も大切だと思います。

会場は硬いレスリングマットで、そのマットを守る為にそのエリアは飲食物持ち込み禁止でした。ただ会場内にはスポーツドリンクやちょっとした食べ物がある場所が設けられており、また昼食は会場となった高校のカフェテリアを利用することができました。大会二日目にはさらに健康的な食事の選択肢が増えました。選手にとって適切な食事を提供することは大切だと思います。富木先生の夢に近づく為にも、観客をもっと動員できる環境を

くりもあつたほうがよいと思います。もつと見やすいスコアボードや聞きやすいアナウンス、ルール説明などが書かれたパンフレット。各チームのユニフォームもあつたほうが選手のモチベーションを上げやすいですし、プログラムに選手の略歴のいいいすし、報道取材してもらえるともつといいですね。

【最後に】今回の国際大会をとても楽しむことができました。また、形と乱取、両方ともスキルアップできました。これから稽古していく上での方向性も見え、今後頑張る活力を得ました。アメリカ人として日本とアメリカを比べながら目をできたことも嬉しく思います。今後も国際大会が発展していくように祈っています。



## 【第七回 国際合気道競技大会結果】

- 種目別混合団体戦 ■①UK 昭道館②BAA Red③BAA Blue④JAA 昭道館
- 短刀乱取団体戦 ■「男子」①BAA Red②BAA White③Brazil A「女子」①International A②BAA Red③JAA 昭道館A④JAA 昭道館B
- 短刀乱取個人戦 ■「男子」①Marco Crispini (UK 昭道館)②Christian Kikham (UK 昭道館)③Sergio Lima (ブラジル)④James Bird (BAA)「女子」①河村未来 (JAA 昭道館)②Danielle Jones (BAA)③Gitta Wolput (ミルギー)④南寛子 (JAA 昭道館)
- 演武競技 ■「自由技」①酒井進之介・菅野健太郎 (JAA 昭道館)② Danielle Jones・Chris Moran (BAA)③Ricardo Lobo・Flavio Neves (ブラジル)「古流第三(護身)の形」①大西美緒・酒井朱音 (JAA 昭道館)②菅野健太郎・松井孝好 (JAA 昭道館)③Kirsty Barnes・Marco Crispini (UK 昭道館)④ Martin Livingston・Ali Topping (UK 昭道館)「基本の形十七本(有段)」① Martin Livingston・Ali Topping (UK 昭道館)② Danielle Jones・Chris Moran (BAA)③ Paul Carr・Mick Pratt (BAA)④ ブランシス・本松良太 (JAA 昭道館)「基本の形十七本(無段)」① Christian Kirkham・Magne Pettersen (UK 昭道館)② ジェニリー・ジェン・カレブ・マクナイト (JAA 昭道館)③ Liam Boland・Nicholas Gradys④ Robert Kusma・Ryan Pipkin

## 編集後記

日本国外で開催された二回目の国際大会。昭道館本部から参加したメンバーのレポートは六十ページ以上に及び、それを編集(カット)してお届けしました。国際大会は地方大会と違って高い運営レベルが求められる大会です。国際大会が日本国外で開催される前にも、海外で「国際的な」大会が開催されてきました。その時には、四年前のイギリスでの大会、今回のアメリカでの大会ほど皆が口をそろえて多くの問題点を並べていたという記憶はありません。つまり国内大会としての運営能力はOK。しかし国際大会となるとレベルが違います。もちろん運営の大変さを考えると、アメリカのスタッフもかなりの労力をつぎこまれたのだろうと思います。しかし、ルールを知り、ジャッジがきつちりとできる審判員がほとんどいない、など致命的な問題を抱えた国々で大会を開催するという意見をだす人の無責任さ、それは如何なものかと思えます。

ただ、前回、前々回の優勝者が基本に沿っていない技をしてきたから、今大会で基本からはずれた演武が増えたという意見も多かったのですが、前回といえは勝浦。そう日本で開催された大会でも優勝しているのです。ということは日本国内で開催された国際大会の審査レベルも暗に批判されているということになります。二年後には京都で国際大会が開催されます。国際大会の見本となる運営ができるのでしょうか。ところで唯一の編集係??とも言われている編集係Mは、昨年終わってから半年間ほど「坊ちゃん湯」道後温泉の近くに住んでおりました。道場の稽古に参加することができず、情報が入らない中でどのようにして記事を書こうかと悩んでいる内に月日は流れ・・・というところで一年前の関西大会感想も記載されています。次回発行の為にも、是非、記事材料をご提供ください。お待ちしております。

shodoho@yahoo.co.jp まで。(スパムメールと共に自動削除される場合があります。返信がない場合は再送信してください。)

【Editors】Yumiko Date, Kumiko Mantani  
【Special Thanks】Ms.Niifer Roberts (ニイファー)

## The 31st Kansai Tournament

By Genny Bergeret

The 31st Kansai Taikai was held on November 26th at the Abeno Sports Center, not far from Tennoji station. It was an exciting and very full day of competition, camaraderie and tribute.

Walking into this very large dojo was an interesting experience in itself located on an upper floor of a massive complex, you pass basketball courts and overlook squash courts before coming to the dojo with its large wooden entryway platforms for removing your shoes. Inside, three full arenas are revealed, as well as enough room for a few rows of chairs for spectators along the front all. The familiar traveling banner displaying the famous "mu shin mu gamae" calligraphy made me smile there was no question I had entered a Shodokan space.

My embu partner and I arrived early, but already the mats were crowded with people warming up and preparing, and the air was charged with energy. The opening ceremony included words of encouragement and guidance from Nariyama Shihan as well as the ceremonial return of the trophies from the previous winners and the passing of a pledge of sportsmanship.

The day was very busy, with three events taking place simultaneously. I enjoyed watching all the different varieties of competition, including different levels of

embu from people who had only started a couple of months before to superb high levels with some very creative combinations. It was obvious that a lot of effort had gone into preparing, and it seemed to heighten many people's level of aikido. I found the randori very exciting, there were some really interesting bouts, and it was great to see faces from all over Japan, as well as visitors from as far away as England who came over especially for the event. I was particularly interested by the team events, and enjoyed my first experience watching toshu radori. I was impressed most of all by the overall attitude of support and encouragement. I really felt the competition brought people together, and I thought it was wonderful how strongly people cheered for and congratulated each other.

The event was drawn to a close with an impressive demonstration by Shihan, using both Sakaisensei and Fujimotosensei as uke. Each powerful technique was felt as the impact of the ukemi reverberated around the silent, awestruck hall. The party that followed the competition was a time of celebration and bonding over this memorable experience.

On the whole I found it a very fitting tribute to the true spirit of sportsmanship and I look forward to next year!

## The 2007 International Aikido Tournament Results

**#### Kongodantaisen (Mixed Team Competition) ####** (1)UK Shodokan (Martin Livingston, Magne Petterson, Kirsty Barnes, Jerome Aleong, Marco Crispini, Ali Topping, Christian Kirkham) (2)BAA Red (Adrian Tipling, Nicole Anson, Danielle Jones, Paul Carr, Chris Moran, Laura Beardsmore, Alex Guerandel) (3) BAA Blue (Leo Smalle, Lee Mazacs, Jonathan Moran, Philip Hargreaves, Daniel Ramsden, Jermaine Liburd, James Bird) (3)JAA Shodokan (Miki Kawamura, Fumika Yamasaki, Alan Smyth, Ryota Motomatsu, Hiroko Minami, Rie Yamamoto, Genny Bergeret)

**#### Men's Team Tanto Randori ####**(1) BAA Red (Adrian Tipling, Mick Pratt, Paul Car, Jermaine Liburd, James Bird) (2)BAA White (Jamie Roberts, Francis Robinson, Leo Smalle, Daniel Ramsden, Martin Ladbrooke, Eric Donaldson) (3)USA White (Josh Ramey, Robert King, Ian King, Wade Current, Ari Reinstein) (3)Brazil A (Jo Tada, Sergio de Lima, Renato Pereira, Gabriel Marinho, Bruno da Silva)

**#### Women's Team Tanto Randori ####**(1)International A (Gitte Wolput, Kirsty Barnes, Pam Ridenour) (2)BAA Red (Danielle Jones, Natuley Smalle, Laura Beadsmore) (3)JAA Shodokan A (Mio Ohnishi, Miki Kawamura, Fumika Yamasaki) (3)JAA Shodokan B (Akane Sakai, Nilufer Roberts, Genny Bergeret)

**#### Men's Individual Tanto Randori ####**(1)Marco Crispini (UK Shodokan) (2)Christian Kikham (UK Shodokan) (3)Sergio Lima (Brazil) (3)SJames Bird (BAA)

**#### Women's Individual Tanto Randori ####**(1)Miki Kawamura (JAA Shodokan) (2)Danielle Jones (BAA) (3)Gitte Wolput (Belgium) (3)Hiroko Minami (JAA Shodokan)

**#### Enbu -Free Style- ####**(1)Shinnosuke Sakai - Kentaro Sugano (JAA Shodokan) (2)Danielle Jones - Chris Moran (BAA) (3)Ricardo Lobo - Flavio Neves (Brazil)

**#### Enbu -Koryu goshin no kata- ####**(1)Mio Ohnishi - Akane Sakai (JAA Shodokan) (2)Kentaro Sugano- Takayoshi Matsui (JAA Shodokan) (3)Kirsty Barnes - Marco Crispini (UK Shodokan) (3)Martin Livingston - Ali Topping (UK Shodokan)

**#### Enbu -Seventeen Basic Techniques (DAN)- ####**(1)Martin Livingston - Ali Topping (UK Shodokan) (2)Danielle Jones - Chris Moran (BAA) (3)Paul Carr - Mick Pratt (BAA) (3)Alan Smyth - Ryota Motomatsu (JAA Shodokan)

**#### Enbu -Seventeen Basic Techniques (KYU)- ####** (1)Christian Kirkham - Magne Pettersen (UK Shodokan) (2)Genny Begeret - Caleb McKnight (JAA Shodokan/USA) (3)Liam Boland - Nicholas Gradys (3)Robert Kusma - Ryan Pipkin



Shodoho --- Newsletter of Shodokan ---

The 20th issue (Ver.5)  
 Issuedate : 25th November, 2007  
 < Editorial Supervisor >  
 Tetsuro Nariyama (JAA Shihan)  
 < Publisher >  
 Editor Group of PR Department  
 JAA Kansai Aikidokyogi Confederation

\*JAA --- Japan Aikido Association

# The 2007 International Aikido Tournament

The 2007 International Aikido Tournament took place between 2nd and 4th August in Vandalia, Ohio, USA. 18 members of JAA Shodokan took part in the tournament. Despite difficulties with connecting flights on the way to Vandalia, the team enjoyed the American experience and found the hosts very helpful and friendly.

## ### Seminars ###

Nariyama Shihan conducted two seminars. The lectures and teaching points were translated by Bob Dziubla Sensei of Shodokan USC in California, whose speech became more fluid as the seminars progressed. The seminars focused on the importance of maintaining high standards and technical precision. One could observe during the tournament that the execution of the Junanahon varies from club to club, with sometimes very notable differences. The Kihon (basic form) is different from and should not be confused with the applications and variations. The basic form of the Junanahon (kihon no kata) contains crucial points and principles of Aikido Kyogi, which are exploited in both kata and randori. Seminars at an international offer the chance to learn the principles. The seminars were therefore welcome by the participants of the tournament. It was noted that many BAA members failed to participate in these events, filming them instead.

## ### Judges/Referees ###

Only a handful of referees could judge well and worked very hard to raise the standards of the event, attempting to make up for their colleagues' unprofessionalism. Indeed, many did not understand the rules well and made arbitrary calls during randori bouts, calls, in other words, which had little to do with fact, principle or system. It is of course necessary to understand the principles of both Aikido and refereeing. Regrettably, most did not meet the criteria for refereeing. The people in charge of scoreboards and timekeeping appeared equally unprofessional.

## ### Players ###

"The quality of the players outside Japan has

considerably improved," commented Omori Ryuichi Sensei (formerly Sato Sensei). However, there are still some players who are not familiar with the rules and regulations governing Aikido Kyogi (e.g. clothing norms). Where regional competitions may tolerate a certain amount of individualism, international events have to firmly adhere to a set of norms. Such absurd words of advice as "Use your power!" shouted by one player to another, displays of poor quality techniques appealing only to the unknowing eye, will become rare occurrences. As players continue to raise their levels of competence and skill, and become more closely acquainted with the rules and principles of Aikido, tournaments will assume a more professional form.

## ### Food ###

Some of the non-Japanese members of the JAA Shodokan team made the comment that the food served in Katsuura, Japan in 2005 was more suited to competing athletes than the food on offer in Vandalia. The Japanese members did not express any concern on this subject.

## ### Conclusion ###

Most of the events started on time. The JAA Shodokan team enjoyed the tournament tremendously and was grateful to its American hosts for the extensive preparations they had undertaken and their management skills during the games. Having said that, the American effort did not compensate for the lack of qualified referees and court management staff. The number of individual competitors and participating teams was low, which is partly explained by the World Championships' two-year cycle, a frequency perhaps not everyone is able to follow.

All the past events are lessons that we hope will help us to create a good Aikido festival/tournament in 2009 in Kyoto. We wish to see a great number of competitors and together deepen our understanding of Aikido.